

ボランティア活動を通じた学生の育成
「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」実践報告

Training Students through Volunteer Activities
A Report on “Kids Garden in Hyogo University Junior College”

前田 美智代* ・三井 圭子**
黒崎 令子*** ・金谷 公子****
石川 恵美***** ・井上 朋子*****

(平成28年1月20日受理)

要約

本学保育科では、地域との確かな連携を深めるとともに、地域の子育て事情に即した実践力をもつ保育者の育成を目指し、平成26年度より「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」に取り組んでいる。この事業は、保育科の学生の主体的な参加の下、学生と教員で行う子育て支援事業である。平成27年度は、地域の親子対象に計3回の催しを企画し実施した。本稿は、平成27年度の事業内容とその実践の様子を報告するものである。

キーワード：学生の学び、ボランティア、子育て支援

keywords：students' learning, volunteer, child care support

1. はじめに

「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」は、本学保育科の学生と教員で行う子育て支援事業である。この事業が行われることになったのは、従前から兵庫大学が推進する「大学と地域との連絡推進懇談会に関わる事業についての提案」が全学的に示されたことに起因する。

保育科ではこの提案を受けて模索する中で、子育て支援事業の実施に至り、昨年度(平成26年度)から「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」に取り組んできた。この事業は、地域との確かな連携を深めるとともに、地域の子育て事情に即した実践力をもつ保育者の育成を目的としており、学生が主体となって、歌遊び、絵本の読み聞かせ、運動遊び、製作、自由遊び等といった地域の親子が楽しく集える催しを企画し、運営するものであ

る。将来的にはこの事業が「地域子育て支援拠点事業」の一つとして展開されていくことを願っている。

子育て支援事業は近年、全国各地で盛んに行われ、その数も増加傾向にある*¹⁾。また、平成24年に成立した「子ども・子育て関連3法」では、各自治体における地域の子ども・子育て支援事業の充実が謳われた。さらに平成27年から各自治体で始まった「子ども・子育て支援新制度」は、「子ども・子育て関連3法」に基づき、共働きの家庭だけでなく、すべての子育て家庭を支援する仕組みとして制度化された。地域の子育て支援事業に関しては、3つの新規事業が加わり、「地域子育て支援拠点事業」や「利用者支援」等の計13事業が「地域子ども・子育て支援事業」の対象として具体的に示された*²⁾。そして、各自治体の実状に応

(*まえだみちよ 保育科准教授 幼児教育・保育)

(**みついけいこ 保育科講師 幼児教育)

(***くろさきいこ 保育科講師 幼児教育)

(****かなたにきみこ 保育科講師 保育・幼児教育)

(*****いしかわえみ 保育科講師 保育学・幼児教育学)

(*****いのうえともこ 保育科講師 音楽)

じて実施することが求められた。このように近年の動向からも、より一層地域の子育て支援が求められていることが分かる。そこで、本学において地域の子育て支援を行うにあたって、地域の子育て支援事業が推進される背景は理解しておく必要があるだろう。前述した「地域子育て支援拠点事業」は「乳幼児及びその保護者が相互の交流を行う場所を開設し、子育てについての相談、情報の提供、助言その他の援助を行う事業」として位置づけられているが、まさに本学が目指す子育て支援事業と合致している。そこで、次項では「地域子育て支援拠点事業」に係る資料を参考に、子育て支援事業が活発化される背景を整理しておくこととする*³⁾。

(1) 地域の子育て支援事業が活発化される背景

まず、少子化、核家族化の進行や地域のつながりの希薄化により、子育てが孤立化してきている。その結果、家庭や地域における子育て機能が低下し、また子育て中の親の不安感や負担感が大きくなってしまった。そのような中で児童虐待の問題が深刻化してきたことも否めない。また、仕事をもつ親は子育ての時間の不足に悩み、一方専業主婦は日々の子育ての孤独感に陥っているという現状もある。その他、3歳未満児の約7～8割は、家庭で親が育てているというデータもあるが、子ども自身が多様な大人や子どもと関わる機会が減っているという、子どもの人との交流不足も課題となっている。

そこで、教育、保育施設を利用する子どもの家庭だけでなく、在宅の子育て家庭を含むすべての家庭及び子どもがニーズに合ったサービスを受けられるよう、各自治体に子育て支援の充実が求められた。そして、子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安、悩みを相談できる場所を提供する事業として「地域子育て支援拠点事業」が設置されることになったのである。

以上、地域の子育て支援が活発化される背景について述べてきたが、これらを踏まえた上で本学における地域の子育て支援事業を実施する必要があるだろう。本学の学生も、実生活の中で乳幼児

と関わる機会がないまま進学してくる者が少なくはない。しかし、この事業に学生が参画することは、地域に子育て支援の場を提供するだけでなく学生自身の学びの場にもなる。次項では、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」における具体的な活動目的を述べることとする。

(2) 「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」の取り組みに向けて

「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」での具体的な活動目的を次のように設定した。

- ①子どもへの接し方や保護者への対応の仕方を学ぶ。
- ②保育に関する催しの企画力や運営力を身に付ける。
- ③地域の子育て中の親子に交流の場を提供し、交流を促進する。
- ④子育てに関する相談・援助を行い、保護者の孤立感を少しでも解消できる手伝いをする。
- ⑤子育て中の保護者のニーズを知る。

本学保育科では上記の内容を目的として、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」を平成26年度は年間計5回、27年度は年間計3回実施した。次節からは、平成27年度の事業内容と実践の様子を記述していくこととする。

2. 活動内容と課題

(1) 全3回の活動概要

平成27年度は、下記の通り計3回実施した。

- ①2015年5月16日(土)

「運動会を楽しみましょう」

- ②2015年7月4日(土)「七夕のつどい」

- ③2015年11月21日(土)「絵本ミュージカル」

一般参加者については、募集する子どもの年齢を低年齢の1歳から小学校入学前までの乳幼児と設定した。これは、子育て中の保護者がどの時期に不安になったり辛いと感じたりするのかを把握しておく必要があると感じたからである。そして、案内方法として、チラシを作成し、さらにそ

れを関係各所へ配布することによって参加者を募った。今年度は、昨年度の成果もあり、募集後もなく定員に達した。

一方、学生のボランティアスタッフについては、年度当初に保育科全学生に呼びかけ、募集した。そして、参加することになった学生は、各回、企画、計画、実施、反省を行い、次の催しへと繋いでいった。各回の準備期間は約一か月程度であったが、各学年の学生が授業の空き時間、昼休みや放課後に集まり、計画、準備を進めた。

次項では各回の実践内容と課題を記述していくこととする。

(2) 活動の記録

①運動会を楽しみましょう

表1) 運動会を楽しみましょう

催し名	運動会を楽しみましょう
開催日時	2015年5月16日(土) 10時30分～11時30分
開催場所	兵庫大学体育館
参加人数	子ども38名、大人41名(親子30組)
活動内容	・親子体操(ふれあい遊び) ・わんぱくサーキット ・玉入れ ・劇「花まつりのおはなし」 ・お土産コーナー
学生スタッフ	72名

i) 活動内容

まず最初は、子どもと保護者、また子どもと学生がふれ合える遊びとして、子どもたちが保護者や保育者の股の間をくぐったり、足の甲に乗ってバランスを保ったりするといった、身体を動かさず遊び等を行った(写真1)。始めは緊張している子どももいたが次第に笑顔が見られるようになり、心も身体もほぐれていく様子が窺えた。

次に行ったのが「わんぱくサーキット」である。キャタピラ、マット運動、ボール遊び、跳び箱ジャンプ等の中から年齢に合ったサーキットのコースを選んでもらい、それぞれに取り組んでももらった(写真2、3)。興味をもち、何度も挑戦しようと

する子どもの姿が多く見られた。

その後、色別対抗の玉入れを行った(写真4)。子どもの安全を配慮し、玉とかごは全て学生が制作した。また、年齢に応じて、かごの位置や高さを変える等の工夫を加えた。その成果もあり、子



写真1) 親子体操(ふれあい遊び)



写真2) わんぱくサーキット(キャタピラ)



写真3) わんぱくサーキット(フープコーナー)



写真4) 玉入れ

子どもも保護者も必死になって取り組み、会場が一気に盛り上がった。

最後は、学生が大学行事に向けて練習していた「花まつり」の劇を鑑賞してもらい、会を閉じた。

この催しを開催するにあたって学生が事前に書いていた指導案は図1の通りである。

ii) 成果と課題

ここからは、学生アンケートを基に成果と課題を分析する。

まず、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」を楽しみにしていたかとの問いについて、「とてもそう思う・そう思う」との回答が97.2%、終了後「参加してよかったか」との問いには100%の学生が良かったと答えていた。初めての体験であった学生も多く、心待ちにしていたことが窺えた。また、終了後は全員の学生が充実感で一杯になった様子が見えた。

次にその理由を具体的に探っていきたい。

まず、「準備をするにあたり、子ども第一に考えて準備をした」との回答が見られた。子ども第一の準備が具体的にどうするものか一つの事柄において、実際に試してみることで、具体的に成果と課題が見えたことが大きな喜びとなったようだ。体験することの重みだと思われる。

また、「最初は保護者から離れず、全く関わりが持てなかったが、あきらめずに話しかけスキンシップを取り続けた。少しずつ緊張がほぐれ、笑顔が見えるようになって、終了前にはすっかり打

ち解けてくれた。その上別れるのをさみしがるまでになったことが、何よりの喜びだった」との記述も見られた。不安で一杯の子どもたちの気持ちを理解し、その気持ちに寄り添って、時間をかけて関わろうとした学生の努力が見えるようである。幼児とつながりを持つためには、時間をかける必要があることを学べていると理解する。

開催中、色々なアクシデントもあったが、そのことについては「時間通りに進まず、予定していた種目を短時間で終えなくてはならなかった」、「リハーサルと違った箇所が多くあった」等と記述している。それぞれの場で臨機応変に対応でき、事なきを得たことは何より学生にとっては大きな自信につながったようだ。「変更しながら最終的には時間通りに進めたし子どもたちにも喜んでもらえて良かった」、「保育科みんなの協力があったため変更もあったが、対応でき成功することが出来て良かった」などの記述がアンケートに記載されていたことから窺える。

他には「この日は身体を動かす運動遊びを予定していたが、1対1で関わったので、怪我もなく、ルールも個別に丁寧に伝えられたので夢中で遊ぶことが出来た」との記述もあった。このような運動遊びには危険が伴うこともある上、またルールが徹底されないと楽しく遊べないことも理解できたようだ。

以上は学生の記述に見られた成果だが、一方、戸惑ったことや、その経験から見い出せた自己課題についての記述も見られた。例えば、「子どもがずっと泣いていて困る事が多く、その時に距離をうまくつかめなかった事が、自分の中ですごく悔しくて、もどかしかったので、次のボランティアまでに、その辺りをしっかり学習しておきたいと思いました。でも、今回ボランティアに参加できて、たくさん子どもと関わることができ、より一層保育士になりたいと思えました。」との記述があった。保護者から全く離れられない子どもの対応に大変困っていた学生であったが、自分で課題をもち、次に繋げようとする前向きな姿勢を読み取ることができる。

また、時間配分をより細かく打ち合わせる必要

があったという感想も多く見られた。その場に応じた臨機応変な行動も重要であるが、打合せを行う中で各内容にかかる時間を実際に動きながら何度もシュミレーションしておく必要があるだろう。

最後に、学生の行動から見られた今後の課題を取り上げる。それは、参加している子ども全員の動きを見渡すという視点がなかったことである。自分の担当の一人の子どもにはしっかりと関わることができていたが、参加している子どもたちがどのように動き、何人の子どもたちが遊びの内容を理解して楽しんでいるのか、また何人の子どもが全体の輪に入れていないのか等を把握しようとする姿勢があまり見られなかった。今後は、学生が一人の子どもと関わりながらも、責任を持って、全体の動きを見渡せるという力量を身に付けていってほしい。

②七夕のつどい

表2) 七夕のつどい

催し名	七夕のつどい
開催日時	2015年7月4日(土) 10時30分～11時30分
開催場所	兵庫大学11号館201教室と芝生広場
参加人数	子ども40名、大人40名(親子30組)
活動内容	1. はじめのことば 2. えほん「たなばたものがたり」スライド映写 3. 楽器を使って演奏しましょう 曲「たなばたさま」 4. お楽しみコーナーをまわしましょう ①シャボン玉遊び ②さかなつり ③バルーンアート 5. おみやげをいただきます
学生スタッフ	48名

i) 活動内容

会場には大きな笹や、野菜で作った生き物などを飾り、子どもたちを迎えた。プログラム前半は、絵本「たなばたものがたり」をスクリーンに投影しながら読み聞かせを行い、その後「たなばたさま」の歌をみんなで歌ったり、カスタネットや鈴



写真5) 楽器演奏



写真6) シャボン玉遊び



写真7) さかなつり

を使って演奏したりした。歌と楽器の音色が会場に響き、和やかな雰囲気になった(写真5)。

プログラムの後半は芝生広場に移動し、シャボン玉遊び(写真6)、さかなつり(写真7)、バルーンアート(写真8)の3つのお楽しみコーナーを



写真8) バルーンアート

順に回ってもらった。シャボン玉遊びは年齢に応じて遊べるよう、ストローだけでなく、うちわやハンガー等も準備した。大きなシャボン玉を作ったり、できたたくさんのシャボン玉を追いかけてみたり等、普段できない体験に歓声が上がっていた。さかなつりコーナーでは試行錯誤しながらも一生懸命に魚を釣ろうとする子どもの姿が印象的だった。そして、バルーンアートコーナーでは、学生が風船の作り方を説明し、風船づくりを体験してもらったが、子どもと保護者が一緒になって楽しそうに作っていた。最後にお土産を渡し、会を終えた。

ii) 成果と課題

成果としては、学生本人が積極的にできたか、そうでなかったかという振り返りができていた。そして、瞬時の判断、決断と動きを考える機会にもなっていた。また、乳幼児の姿を目の当たりにしてようやく、できることできないこと、難しいこと等が分かり、幼児理解の重要性を感じ取った学生も多かったようである。例えば、「どの年齢の子どももシャボン玉を楽しんでくれてよかったです。特に1歳や2歳児でもうちわでつくるシャボン玉は簡単にできてとても嬉しそうにしてくれてよかったです」というようにうちわで作るシャボン玉についての記述が多く見られた。一方で「今回行った3つの遊びは1才児には難しそうだった」、「1才児には難しいなと思った。バルーンアートも作りにくそうだった。だけど、シャボ

ん玉を追いかけて遊ぶのがすごく楽しそうだった」のようにできないことにも気付けた学生もいた。

また、小さな子どもが楽しめる方法を自分たちで生み出し、工夫しようする姿勢も見られた。例えば、魚釣りでは、魚の大きさや釣り竿の長さ等の遊び方の工夫や改善を繰り返し行っていた。

しかし、お楽しみコーナーを効率よく回ってもらう順序までは考えられていなかったようである。「お楽しみコーナーを回る順番で、バルーンアートを先にする、シャボン玉でバルーンアートがぬるぬるになっていたので順番を変えた方が良かったと思いました」というように、参加者が回る順番を改善点として記述している学生が複数見られた。今後は、やってみて気付くのではなく、見通しを立て、子どもたちの心理や行動を予測しながら十分な準備を行うことが課題である。

最後に、日本の伝統文化の一つである七夕まつりであるが、現代社会では、家庭において七夕まつりを楽しむ機会が少なくなってきている。しかし、七夕まつりは、子どもたちにとって、日本の伝承文化に親しむ機会となり、また星空、宇宙に興味をもったり、笹飾りの制作を楽しんだり等と様々な意義をもっている。だからこそ、保育者はこの七夕に関する知識を十分に理解した上で、今後も保育現場における7月の行事として大切に扱ってほしいものである。

例えば、願い事を短冊に書く習わしがある。今はサインペン等の便利なものを用いるが、昔はサトイモの葉っぱに溜まった朝露で墨をすり、筆で書いていた。とても厳かかつ神秘的であり、天の星に願い事が本当に届くように思われる。他、短冊を笹の枝に付ける場合、今は粘着テープを使用してしまうが、昔は「こより」を使用して、笹の枝に括り付けていた。このような便利なものがなかった時代のあの素朴さも子どもたちに伝えていくことはできないだろうか。

今回はまず子どもたちに楽しんでもらえる活動内容を学生たちは計画し、実施したが、今後は日本の伝統文化である行事としてさらに価値あるものにするために、上記に述べたような様々な行事

の本来の姿や習わし等も学生自身が学習し、子どもたちに伝えていくことができるよう、教員が助言していく必要もあるだろう。

③絵本ミュージカル

表3) 絵本ミュージカル

催し名	絵本ミュージカル
開催日時	2015年11月21日(土) 10時30分～11時30分
開催場所	兵庫大学体育館2階(リズム室)
参加人数	子ども24名、大人23名(親子20組)
活動内容	○学生による手遊び ・お姉さんと一緒に遊みましょう 「手はどこだ」 ・お家の人と一緒に遊みましょう 「パンダちゃん」 ○絵本ミュージカル 「ひつじパン」「おっばい」「いつもいっしょに」「みんなうんち」「ぴょん」「もりのおふろ」「おおきなかぶ」「たまごのあかちゃん」 ○お土産コーナー
学生スタッフ	11名



写真9) 手遊び



写真10) 絵本ミュージカル「みんなうんち」

i) 活動内容

今回は「NPO法人生涯アカデミー」より専門家を招き、音楽と絵本の読み聞かせによる絵本ミュージカルを楽しんだ。まず、絵本ミュージカルが始まる前の導入として、一人のできる手遊び、さらにそれを親子や学生と子どもといったペアのできる遊びへと展開し、取り組んだ(写真9)。また、強弱や速さに変化を付けながら行うなど音楽的な要素も含まれ、先に続く絵本ミュージカルの導入としてふさわしい内容になっていたと思われる。

講師による絵本ミュージカルを鑑賞している間は、親子の側と一緒に、専門家による多彩な表現やパフォーマンスを楽しみながら、どんな絵本が子どもの心を引きつけるのか、どんな音楽が心に届くのか等、それぞれの子どもたちの表情を見たり、ことば、声等に耳を傾けながら関わった(写真10、11)。

また、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学



写真11) 絵本ミュージカル「いつもいっしょ」

部」は今回が今年度最後ということもあり、お土産を何にするかという点で考え、記念に残る物にしようということで、それぞれの年齢にあったパズルを制作することになった(写真12)。まず、絵を考えることから始め、木に原画を描き、色塗り



写真12) お土産のパズル

まですべて学生が行い、出来上がったパズルを見て完成度の高さが自信にもつながったようである。

ii) 成果と課題

今回のアンケートの「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」を楽しみにしていたかの問いについて、「とてもそう思う・そう思う」との回答が100%、終了後、保育現場での保育の仕事を想像できたかの問いに対して、「とてもそう思う・そう思う」が90.9%の学生が答えている。その理由を探っていききたい。

自由記述を見ていると、子どもとの関わりや手遊びの実践についての記述よりも、今回は、専門家による絵本ミュージカルの鑑賞ということで、ボランティアをしながら、自分自身がとても勉強になったという記述が非常に多く見られた。具体的な内容としては、「今後保育士になった時が想像できる内容でした。絵本をただ読むだけでなく、楽器を使ったり歌いながらの読み聞かせはとても楽しかったです」、「ピアノや楽器を使って絵本を読むと、想像力が広がるように思いました」や「絵本ミュージカルは絵本のストーリーにそって、ピアノや楽器などで音楽が展開されていき、子どもも大人も楽しめた。保育の現場でぜひ活かしていきたい」というような記述が多く記載されていた。

以上が学生の記述からみた成果だが、課題としては、当日の流れが理解できていないために、ど

こでどのように子どもと関わっていけばいいのか、保護者から離れて絵本に近づいていく子どもにどのように声をかければいいのか、子どもが落ちついて見られるためにどうしたら良かったのか等の反省があった。

講師の専門家がしてくれるからではなく、いろいろな子どもの姿を想定して臨むことも必要であると感じる。

その他、当日は加古川附属幼稚園や他の幼稚園・保育所などの行事と重なり、その行事のボランティアに参加する学生、また1年生が実習と重なっていることもあり、ボランティアの人数がとても少なかった。当日にキャンセルの学生もあり、準備がぎりぎりになってしまった。当日までの準備なども含めてある程度の人数は必要であり、日程についても今後の課題でもある。

次節では、学生のアンケート結果を基に学生の活動への成果と課題を振り返り、保育科の学生としてどのような学びになったのかを考察する。

3. 考察

本節では全3回の学生アンケートを比較しながら、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」での学生の学びについて考察することとする。

まず、問1のこの催しを楽しみにしていたかどうかという問いに対する回答は表4の通りである。どの回も、参加学生の9割以上がこの催しを期待していたことが分かる。ただ3回目の「①とてもそう思う」は1、2回目と比べて、回答率が低い。これは、1、2回目のプログラムは1時間分全てを学生が企画し進行したことに対して、3回目は専門家による公演が主であったことも関係しているかもしれない。準備に時間がかかる等の苦勞が多くても、学生自身が催し全体を企画、運営した方が学生の期待値も高くなると読み取ることができるだろう。ボランティアをしながら専門家の公演を鑑賞できる機会も、将来保育者になる学生にとって意義のあることであるが、次年度以降、検討していきたい点である。

表4)「問1 キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部を楽しみにしていた。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	48.6%	43.8%	9.1%
②そう思う	48.6%	47.9%	90.9%
③どちらでもない	2.8%	8.3%	0.0%
④そう思わない	0.0%	0.0%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

次に、問2のこの催しに参加して良かったかという問いに関しては、表5の通りとなった。どの回もほぼ100%の学生が満足していることが分かる。2回目に「どちらでもない」と答えた学生の中には、「今回は子どもたちを連れて遊ぶのではなかったのでどうしたらいいか分からず積極的に取り組めなかった」との記述があった。やはり、子どもとの直接的な関わりをもつことができなければ参加したことの価値が見出しにくいかもしれない。子どもの人数の関係上、難しいこともあるが、全ての学生が子どもと深くかかわれるような配慮が必要であるだろう。

そして、問3の準備が万全であったかという問いに対しては、1回目、2回目はもう少し入念な準備ができたのではないかと感じている学生が多いことが分かる(表6)。前述したようにこの2回は催し全てを学生が企画、運営、進行したのであるが、今後は十分な準備期間をもち、学生が自信をもって子どもたちを迎えられるように指導していきたい。

表5)「問2 キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部に参加してよかった。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	76.4%	62.5%	54.5%
②そう思う	23.6%	31.3%	45.5%
③どちらでもない	0.0%	6.3%	0.0%
④そう思わない	0.0%	0.0%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

表6)「問3 準備は万全でしたか?」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	13.9%	8.3%	54.5%
②そう思う	65.3%	58.3%	45.5%
③どちらでもない	16.7%	22.9%	0.0%
④そう思わない	4.2%	10.4%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

問4の保育現場での保育の仕事を想像できたかという問いに対する回答は表7の通りである。学生の大半が学生自身の中でこのボランティアでの経験が保育現場での仕事に生かせると感じていることが分かる。ただ、「とてもそう思う」と答えた学生は2割に満たない。今年度の振り返り方法は、アンケートのみに留まっていたが、今後は、どのような力が身につく、この経験が保育現場でどのように役立つのか等を、学生同士で共有する時間が必要なのではないか。そうすることによってさらに学生の意識を高めることができるのではないと思われる。

表7)「問4 保育現場での保育の仕事を想像できた。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	15.3%	18.8%	18.2%
②そう思う	76.4%	45.8%	72.7%
③どちらでもない	8.3%	33.3%	9.1%
④そう思わない	0.0%	2.1%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

問5の保育者になりたいと思ったかという問いの回答は表8の通りである。この問いも問1と同様に、主体的な取り組みが多い方が、保育者への憧れも強くなると読み取れるだろう。

表8)「問5 保育者になりたいと思った。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (総本)
①とてもそう思う	62.5%	56.3%	36.4%
②そう思う	30.6%	35.4%	54.5%
③どちらでもない	6.9%	8.3%	9.1%
④そう思わない	0.0%	0.0%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

問6はこの経験を通して今後自分に必要だと思ったことは何かという問いであった(3つまで回答可)。結果は図2の通りである。

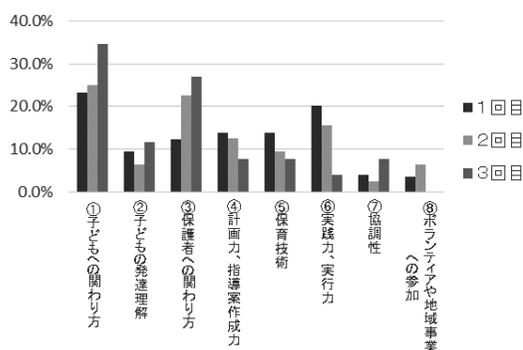


図2)「問6 キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部を経験して今後自分にとって必要だと思ったことは何ですか? (3つまで回答可)」

このボランティア経験を通して、各回ともに、「①子どもへの関わり方」、「③保護者への関わり方」を今後学んでいく必要があると捉えている学生が多いことが分かる。さらに、「④計画力、指導案作成力」、「⑤保育技術」、「⑥実践力、実行力」を選択した学生の割合が、各回が進むにつれて減少しているのに対して、「①子どもへの関わり方」、「③保護者への関わり方」を選択しているが学生の割合が増加していることは明白である。これは、計画力や実践力以上に、実際に経験していく中で、子どもや保護者とのかかわりの重要性に気付いた結果であろう。例えば、前章に取り上げた、保護者から全く離れられない子どもの対応に困り、次回までにはしっかりと学習しておきたいと述べていた学生は、2回目の感想では次のように記述している。「今回2回目の参加でした。前回

はよく泣く子が担当で、上手に接することができず、今回、不安な気持ちがあったのですが、全体を見て多くの子どもと笑顔で接する事ができたのが良かった点です。1人で遊んでいる子に、近づいて、一緒に遊んだり、いろんな子と関わる事ができました。そして、前回の担当だったY君もいましたが、自分からおもいきって接してみると、上手に接することができて、克服できたので良かったです」。前回の自分の行動をよく振り返り、今回は目標をもって積極的に子どもと関わった結果、達成感をも味わえた様子が窺える。この学生は1回目も2回目も「①子どもへの関わり方」を選択しているが、1回目は自分の力量不足から選ばれた回答であるのに対して、2回目は克服できたけれどもっと身に付けておきたいと思い、選択したのではないだろうか。今後、項目内での学生の意識変化も分かるよう、アンケート内容を工夫する必要があると思われる。

他にも、前回の自分の行動と比べて、次の自分への課題を見出している学生が複数見られた。その一例を取り挙げる。「多くの子とたくさん関わられて、とても楽しかったです。保護者とも積極的に話せたり、1回目の時より子どもに対して、言葉がけが多くできたので良かったです。今回で改めて保育者になりたいと思いました。合奏の際、鈴を持ってない1歳半の子どもがいました。代わりに私が鳴らしたけれど、鈴に触れる機会が少なかったので、発達年齢をしっかりと理解して、道具の使える・使えないでどうすれば良いかを、これから考えていくようにしようと思います。もっと子どもに上手に関わる方法、発達年齢をしっかりと学ばないといけないと思いました」。この学生は、1回目のアンケートでは、問6に対して「①④⑤」を回答していたが、2回目では「①②⑤」へと変化していることから、「②子どもの発達」について学ぶ必要があると実感していることが分かる。

実際に学生の様子を見ていても、子ども一人一人への対応や声のかけ方において回数を重ねるごとに笑顔で対応できるようになり、共に活動を楽しめるまでに成長できていたように感じる。連続

的にボランティア活動に参加することによって少しずつ学生に自信が付き始めているように窺えた。

そして、保護者との関わりについてであるが、保護者の方々は、温かいまなざしで学生に挨拶をしてくれたり、「ありがとう」と感謝の気持ちを表してくれたりしていた。そのような保護者の温かさが学生にも伝えわっていたようで、自由記述項目の中にも「保護者の方ともたくさんいろんな話をできてよかった」等といった保護者と関わったことについての記述も数多く見られた。一方で、「保護者との関わりが難しかったです」と記述している学生もいることから、自分より年上の人たちへの接し方にまだまだ苦手意識をもつ学生も少なくないことも分かった。他、「保護者の方と子どもとの関係を見ることができてとても良かったです」と書いている学生も見られた。実習先では保護者と関わる機会が少ないだけでなく、親子が一緒にふれあっている場面を目にする機会もあまりない。この短大での地域子育て事業は、学生にとっては、子どもあるいは保護者と関わる機会を増やすだけでなく、親子の関係性を学ぶ貴重な機会となることも分かった。

問7のこの経験を通して、地域の子育て支援に貢献できたと思うかという問いに対する回答は表9の通りであった。

表9)「問7 キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部を経験して地域の子育て支援に貢献できたと思いますか。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	31.9%	31.3%	18.2%
②そう思う	55.6%	52.1%	81.8%
③どちらでもない	12.5%	14.6%	0.0%
④そう思わない	0.0%	2.1%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

各回8割以上の学生が、地域に貢献できたと感じていることが分かる。恐らく、地域の親子に楽しく遊べる場を提供することができたという観点から選択しているのであろうが、一方で一瞬では

あるが保護者がほっとした顔で我が子の姿を見て目を細める姿も垣間見ることができた。学生の感想の中には「笑顔の子どもを見て、保護者も笑顔になっていた」という記述も見られたが、保護者の方にこのような時間を提供していること自体が、地域の子育て支援の一助になっていることを学生にも感じ取ってもらえていることを期待したい。

最後に、問8のまた機会があれば参加したいかという問いに対する回答は表10のようになった。

表10)「問8 また機会があれば参加したい。」

	1回目 (運動会)	2回目 (七夕)	3回目 (絵本)
①とてもそう思う	54.2%	47.9%	36.4%
②そう思う	37.5%	47.9%	63.6%
③どちらでもない	8.3%	4.2%	0.0%
④そう思わない	0.0%	0.0%	0.0%
⑤まったくそう思わない	0.0%	0.0%	0.0%

この回答からも分かるように、この事業は学生にとって意義のある経験となり、さらに9割以上の学生がこのようなボランティアに参加することを望んでいることが分かった。次年度以降も、時期、回数、人数、運営方法を再検討した上で実施していきたい。

本節では、学生のアンケート結果を基に、ボランティア活動を通して得られた学生の成果と課題について考察してきた。参加した学生は、「子どもとかわりたい」、「子どもを理解したい」という目的を持ち、実際に子どもと触れ合うことで、将来の自分の保育者像を想像したり、準備の重要性や子どもへの言葉がけについての課題を見つけることができていた。今後、学生にはさらに子どもの遊びをより多く知り、またそれらの遊びを各年齢に応じた内容と方法へと十分に展開できる力を身に付けておく必要があるだろう。そして、子どもの喜び、興味や意欲の向上へと繋げるための工夫、一方で安全への配慮もできるようになってほしい。さらには、経験を重ねる中で、コミュニケーション力を高め、保育者が一方的に活動を進めるのではなく、子どもと共に遊びを考え、より子ども

もに寄り添った内容でかつ発展性のある活動を作り上げることができる力量も保育者として備えていってほしいと思う。

次節では、冒頭で掲げた「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」の活動目的に対して得られた成果をまとめ、今後の展望について述べることにする。

4. おわりに

「1. はじめに」で「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」における5つの活動目的を示したが、この目的に対する成果について整理する。

「①子どもへの接し方や保護者への対応の仕方を学ぶ」に関しては、前節で述べたアンケート結果からも分かったように子どもや保護者との関わりについて多くの学びを習得できていた。子どもとの関わりの中では、1時間という限られた時間の中、あるいは回数を重ねる中で、初対面の子どもの接触に苦悩した学生が自分なりに創意工夫して子どもとの距離を縮めていく等の学生の様々な成長が見られたことから大きな成果があったと言える。

「②保育に関する催しの企画力、運営力を身に付ける」に関しては、実習未経験の学生も多い中で、先輩の学生がリーダーシップを発揮し、多彩な遊びを準備、実践できたことに大きな意義があったと思われる。その中で、当日までに何度も打ち合わせを重ね、様々な場面をシミュレーションする等といった入念な準備の重要性や、予想される子どもの姿を話し合い、子どもへの言葉かけや保育者の援助内容を具体化しておくことの必要性にも気付くことができていた。次年度へと生かしてほしい。

「③地域の子育て中の親子に交流の場を提供し、交流を促進する」については、前節で述べたように、学生自身が地域の子育て支援に貢献できたことと実感できていたこと、また親子が楽しくふれあう様子を多く観察することができたことから一定の成果を得ることができたと思われる。今後は、さらに地域の親子同士が交流しやすいような環境づくりにも力を入れていきたい。

「④子育てに関する相談・援助を行い、保護者の孤立感を少しでも解消できる手伝いをする。」についてであるが、保護者のアンケートにおいて、子ども一人ひとりに学生が一人ずつ終始付いてくれて大変助かった、良かったという声が大変多く見られた。中には、「子どもが本当楽しそうで、私も笑って写真をとる余裕が持てました。ありがとう」というような感想もあり、参加した保護者の声からも成果があったと言える。これらの感想からは、子育て中の保護者は、子どもを少しの間でも誰かに遊んでもらえたり、少し距離を置いて子どもを見ることができると望んでいることも分かった。今後は、今年度十分に行えなかった「子育てに関する相談、援助」の部分を加えながら、保護者が子どもを安心して学生に預けられる時間を少しでも多く取り入れたいと思われる。

「⑤子育て中の保護者のニーズを知る」については、アンケートから保護者が求めている催しの内容を知ることができた。ダンス、音楽、造形、体力づくりといった内容を希望している保護者が多いことが分かった。来年度の内容を企画する際に生かしていきたい。

ここまで、「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」の活動目的に対する成果についてまとめてきたが、参加した地域の親子からも大変好評で、「来年度も楽しみにしています」との声が多く寄せられており、地域の子育て支援の一助になっていると実感できた。

今後の展望としては、「地域子育て支援の拠点」として、さらにどのようなことができるのかを探求することが課題である。子育て中の親の願いやニーズを的確に把握し、細やかな支援活動ができるよう研究していきたい。そして、事業を行うことによって親のニーズにどれくらい応えることができたのかといった点も具体的に明らかにしていきたい。

さらに、これまでの「キッズガーデン in 兵庫大学短期大学部」は、教員が、活動日等を決定し、ボランティアを募って実践してきたが、今後は現在までの経験を踏まえ、学生が主体となって企画・立案・運営を行い、さらに充実感・達成感を

体得してほしいと願う。保育の計画を立て、PDCA サイクルを意識し、実践を重ねていくことが、保育技術の向上や、自身の保育観の確立に繋がるであろう。また、前年度にこのボランティア活動や実習等を経験した先輩がその経験を生かして後輩を指導する、あるいは後輩は先輩の姿を見て学ぶといった、学年を越えた交流がさらに活発化していくことを期待したい。実際に親子と触れ合うことで、保育者の仕事を身近に感じたとの感想も多く見られたが、今後ボランティア経験を通じて学生の士気を高め、本学保育科の目指す「質の高い保育者」を育成する機会にしていきたい。

<脚注>

- * 1) 厚生労働省が公表している平成21年度と平成26年度の「地域子育て支援拠点事業実施状況」を比較すると、地域子育て支援拠点事業実施箇所数が5199か所から6538か所へと1300か所以上も増加していることが分かる。

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/index.html

(2015年12月10日アクセス)

- * 2) 「子ども・子育て新制度」の中で具体化された13事業は次の通りである。

①利用者支援事業、②地域子育て支援拠点事業、③妊婦健康診査、④乳児家庭全戸訪問事業、⑤養育支援訪問事業、⑥子育て短期支援事業、⑦子育て援助活動支援事業、⑧一時預かり事業、⑨延長保育事業、⑩病児保育事業、⑪放課後児童クラブ、⑫実費徴収に係る補足給付を行う事業、⑬多様な事業者の参入促進・能力事業

内閣府・子ども子育て本部「すくすくジャパン！子ども・子育て新制度について」(平成27年10月発行)「Ⅶ. 地域子ども子育て支援事業」より

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/setsumei.pdf>

(2015年12月27日アクセス)

- * 3) ①同書「すくすくジャパン！子ども・子育て

て新制度について」「Ⅶ. 地域子ども子育て支援事業」中の「地域子育て支援拠点事業」

②厚生労働省「地域子育て支援拠点事業実施要綱」(平成27年5月21日1次改正)

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000103063.pdf> (2015年12月10日アクセス)

①と②を参考に整理した。